

第四章 民放初のテレビ局(HBC)の開局

4-1 北海道初の民放テレビ局(HBC)の開局

昭和 32 年 4 月 1 日、北海道で最初の民放テレビ放送(HBC テレビ)がスタートしましたが、テレビ放送の開始は、ネットワーク営業を含めた民放営業のあり方を大きく変える出発点となりました。テレビ開局に際して後述する[マウンテントップ方式]を始め数々の技術面での努力と研究の成果は今日の放送革新時代の基盤であった事を民放営業史の一ページとして記録に遺しておかなければならないと思っています。

さて、放送開始時 HBC テレビは、第一チャンネルで 1 日 7 時間の放送を札幌のはずれにある[手稲山]のアンテナから放送する[マウンテントップ方式]に対し、一足早い昭和 31 年 12 月 22 日にテレビ放送を開始した NHK は大通公園に建立された[テレビ塔]からの放送でした。北海道放送は、ラジオに続いてテレビ放送の実施を目指し、昭和 28 年 1 月 30 日に申請書を提出しましたが北海道でのテレビ放送を実現するには、先ず東京-札幌のマイクロ回線を完成させることが必要条件でしたが昭和 31 年 8 月に電電公社によるマイクロ回線が完成して、テレビ放送実現に向けての第一歩が踏み出されています。既にラジオ放送を開始していた北海道放送は、テレビ放送実現に向けて早くから準備を進めてきましたが、テレビ放送実現の大きな原動力となつたのは、昭和 29 年函館で開催された[北洋博]での実験局であったと言われています。この実験放送は 53 日間にも及びましたが、期間中には、北洋博ご視察に来道された天皇・皇后両陛下の函館での上陸第一歩を実況放送を行っています。その後数々の実験を経て昭和 31 年にはいよいよ本放送に向けての離陸体制に入りこの年の 2 月には郵政省の基本方針で札幌地区 2 局(NHK HBC)の免許交付が確実視され、このため HBC テレビは送信所を手稲に建設することを決定して建設作業に着手しました。11 月 9 日には、HBC テレビには第一チャンネルが割り当てられ、いよいよ放送開始が具体化されアンテナ建設の問題と合わせて、営業収入の基盤となる[放送ネットワーク]も極めて重要な問題となってきました。



この当時、中央では日本テレビとラジオ東京(現東京放送)の 2 局が放送を開始していましたが、北海道は北海道放送 1 局の時代でこのため HBC テレビは、東京(銀座七丁目道新東京支社ビル)に自社のマイクロ中継装置を設置して、東京のいずれかの局の番組もネット出来る体制になっていました。

HBC テレビは、難工事の手稲山送信所も完成し昭和 32 年 3 月 1 日第一波を発射し同月の 9 日に本免許が交付され、4 月 1 日正式にスターとしました。開局当時のスタジオは、札幌中心部のビルに置かれ、東京 2 局の番組に自社制作番組を加えての放送がスターとしたのです。



[HBC テレビ]は、第一チャンネルでスタートしましたが、このチャンネルが決定するまでには紆余曲折があったことが当時の記録に残されています。昭和 31 年 1 月 27 日に電波管理審議会は全国のチャンネルプランを提示しましたが、それによるとチャンネルは 6 チャンネルで、そのうちの第一と第二は米軍が使用するため、直ちに使用できないとの事でした。(北海道での米軍の使用はありませんでした)しかし HBC テレビは、当初から北海道という広域エリアをカバーするためには電波到達距離の長い第一チャンネルが必要であるとの観点から第一チャンネル獲得にむけて最大限の働きかけを行い、このことを前提にアンテナ等の工事を進め、11 月 3 日にはアンテナ設置も完了していましたがそれから数日後の 11 月 9 日にチャンネルの発表があり札幌地区には第一チャンネルと第三チャンネルが割り当てられ、マウンテントップ方式の HBC テレビには第一チャンネル、テレビ塔の NHK には第三チャンネルが決定しました。こうして待望の第一チャンネルを獲得した民放初のテレビ局は、昭和 31 年 11 月 29 日に予備免許が交付され、翌昭和 32 年 4 月 1 日の開局を迎える事となりました。



開局に先立ち 3 月 30 日札幌中島スポーツセンターで開局式とテレビ開局とラジオ開局 5 周年の芸能祭が開催されました。

開局日の 4 月 1 日午前 10 時 50 分に上図のテストパターンが写しだされ開局第一日が無事スタートしました。当日は東京の[KR-TV(現在の TBS)][NTV(日本テレビ)]からピックアップした

番組に自社制作番組を加えた放送が行われました。

4-2 マウンテントップ方式と手稲山

北海道放送は、テレビ放送を開始するに当たり、北海道の様な広域圏での放送には[平地式]のアンテナではなく[山頂式]のアンテナが必要であるとの基本方針を決め、昭和28年1月30日提出のテレビ局開設申請書にも札幌大通に建設されるテレビ塔の建設にも参画せず、標高1023メートルの[手稲山]山頂に送信所とアンテナを建設することが明記されていました。テレビアンテナを巡っては、テレビ塔か手稲山かの論争が繰り広げられましたが、結局同年6月9日にNHKはテレビ塔での起工式を行い、一方北海道放送は、6月27日手稲山送信所の起工式を行い、いよいよ手稲山送信所建設の難工事が開始される事となりました。



6月27日起工式を終え直ちに工事が開始されましたが、この山頂に送信所を建設する苦労は想像に絶するものがあつたと、HBC手稲OB会編纂の記念誌にはその記録が克明に記述されています。その記念誌によると、昭和31年8月10日には手稲山道が完成しましたが、この山道は幅5㍍、延長11km、平均勾配9.8度で、この

工事に携った人員は延べ38,400人と言われています。道路が完成した後は、給水、配



電などの工事がこれまた難行を極めたものの、これらの問題も解決して、最後の送信所、アンテナの建設が進められ、年末には1023メートルの手稲山の頂上には36メートルの鉄塔が完成しました。積雪2メートルにも及ぶ厳冬の山頂に機材を搬入する作業は、ブルドーザーによる除雪作業と合わせて行われたものの、ブルドーザー自体が雪に埋もれるなど大変な苦労の連続でした。これらの難作業を終えて2月21日にはすべての機材も搬入され、4月1日の本放送の電波を発射することが出来ましたがこの手稲山アンテナ建設は歴史に残る大

事業であり、現在放送各社のアンテナが林立する手稲の山頂を眺めるとき、この計画を立て艱難辛苦を乗り越えて見事完成させた先人達の功績に心からの敬意を表したい心境に駆られます。送信所開設後の昭和33年8月31日、HBC手稲送信所構内に[完成記念碑]が建立されましたがこの碑には、この計画を先頭に立って推進した当時の北海道放送故阿部社長の感慨を込めた碑文が刻まれています。



[何がこれを完成させたか、手稲山にはリスが居り、兎が棲み熊が出没する。冬は丈余の雪が積もり寒風が吹きすさぶ。今や、この山頂には科学技術の粋を集めた白亜の殿堂—北海道放送テレビ送信所が建ち、60メートルのアンテナが聳

えている、これは世界屈指の大送信所である。(中略)これを成し遂げたものは何か。それは周到な計画、近代技術を最高度に駆使した能率的施工と担当者従業員にみなぎる不屈の精神である。](以下略)。この碑文は歴史の語り部として何時までも手稲山アンテナ建設の偉業を語り続けることでしょう。

4-3 テレビ局開局と受像機

民放にとって最大の経営目標は安定した広告収入の確保ですが、そのためにはより多くの人達にテレビを見ていただくことが必須条件で民放として初めて開局したHBCテレビにとって受像器の普及は経営の面からも大変大きな課題の一つでもありました。HBCテレビが開局した昭和32年4月のテレビの受像器台数は約8,000台でした。



この台数を更に増やすため、狸小路に[HBC サービスセンター]が設けられ、札幌を中心に受像器の普及に努めました。昭和35年7月30日、初期の目的を達して閉鎖されましたがこの3年7ヶ月の努力の甲斐もあり、この時点での道内のテレビ保有台数は82,760と言うデータが残されています。



この当時のテレビ受像器の価額も高額でなかなか一般家庭での普及には時間がかかりました。東京でも[街頭テレビ]でプロレスやプロ野球が放映され大変な人だまりを作りましたが、札幌でも大通公園を始め各所に[街頭テレビ]を設置してテレビのPRに努めました。左図はHBCが札幌大通公園に設置した[街頭テレビ]と一般市民の様子です。



又、各市町村に巡回の[テレビカー]を繰り出してテレビ受像機のPRに努めました。テレビカーが到着すると近隣の住民を始め馬に乗って駆け付ける風景もみられました。



多くの工場などでも受像機が設置され昼休みにテレビを観る従業員の姿が見られる様になり会社にとっても従業員の福利厚生の間からも大変重要視されるようになりました。



各メーカーの技術革新により価額も年々低廉化され、各家庭でも生活のステータスの一番にテレビがあげられ、テレビ受像機は大幅に増加しました。このことは、広告メディアとしてのテレビの位置付けを高め、テレビ広告が大きく発展する原動力となったのです。

4-4 道内放送エリアの拡大

昭和32年スターとしたHBCテレビ、同34年のSTVテレビ両社にとっても放送圏域を拡大して、視聴者の拡大を図ることは、メディアに課せられた責務で有るばかりでなく、営業政策面からも早急に取り組まなければならない課題の一つでありました。特にテレビ広告の大きなウエイトを占める中央広告主にとっても、発展する北海道マーケットは有望なマーケットであり、北海道全域にわたるマーケティング活動を進めることは企業にとっても重要な課題となりつつありました。これまでの採算性の面から出先営業拠点を設けず人的巡回に頼ってきた中央広告主の販売方法を大きく支えたのが新しく始まったテレビ広告でした。テレビ広告によって商品の認知率は高まり、このことが販売面にも反映して売り上げにも大きく貢献しつつありました。このことが、広告会社の北海道進出に拍車をかけ、テレビ放送開始後数多くの中央広告会社(広告代理店)が札

幌に出先を設けて、広告主の北海道エリアでのマーケティング活動をフォローする役割を担っていました。



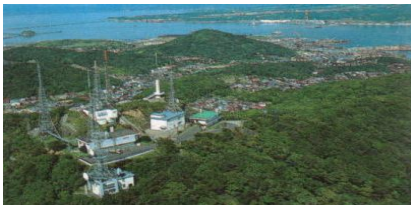
HBC テレビの道内放送サービスエリア拡大の先陣となったのは函館テレビ局で1958年(昭和33年)12月1日開局しました。

写真左図はHBCテレビが誕生する原点となった函館の風景で前方に夜景が美しい函館山を望む事が出来

ます。



函館テレビ局開局芸能祭の様子です。



函館局に続いて開局したのが室蘭テレビ局で1959年(昭和34年)3月21日開局しました。写真はHBC室蘭局のアンテナが立つ測量山からの眺めです。



室蘭テレビ局開局記念芸能祭の様子です。



同年、1959年(昭和34年)12月22日旭川テレビ局が開局しました。写真は開局記念芸能祭の様子です。



次に開局したのは小樽サテライト局です。

送信所は小樽市の手宮公園に設置され1961年(昭和36年)5月16日開局しました。これによって手稲山からの電波の届かない難視聴地域が解消されました。



釧路テレビ局は1962年(昭和37年)5月8日から本放送を開始しました。



帯広テレビ局は1963年(昭和38年)7月27日開局しました。

この後1965年(昭和40年)9月14日には北見テレビ局、翌15日には網走テレビ局が開局し、1957年(昭和32年)4月1日の本社テレビ開局から8年の間に全道主要エリアに8局が開局して北海道内ネットワークの体制が整備される事となりました。

このような拠点都市でのテレビ局開局は、地域情報の受発に多いに貢献する事となりましたが、地域の広告主にとってもテレビのCMを限定されたエリアに流す事が可能となり地域の経済の活性化にも大きな力を及ぼす事ができました。

これらのテレビ局の開局に伴い各地方放送局はこれまでのラジオ番組の制作と併せて地域版テレビ番組の制作にも取り組みましたが、営業部門も地域スポンサーのテレビスポット利用などのプロモーション活動にも務め、商品の販路の拡大と商品のブランドイメージの向上にも大きく寄与しました。

4-5 営業拠点の構築と変遷

1951年(昭和26年)11月30日北海道初の民放として発足した北海道放送は、発足後の同年12月1日には東京支社と大阪支社を開設しました。開設当初東京支社は北海道新聞社東京総局(東京都中央区銀座西7-5)内にありました。

東京支社 現在は東京都港区新橋3丁目 新橋ビル



東京支社は営業の拠点として中央広告主・広告代理店に対する営業活動の他にキー局との関係も大変大きな役割の一つでした。1959年(昭和34年)2月には、銀座7丁目のビルを買収

して[北海道放送ビル]とし、スタジオ調整室なども新設して制作体制も整備しました。

大阪支社 現在は北区堂島 1 丁目 6-20 堂島アバンザ 5 階



関西圏の営業拠点として大阪支局も東京支社と同じ 1951 年(昭和 26 年)12 月 1 日大阪市東区高麗橋 5-11 北海道新聞大阪支社内に開設されました、その後 1954 年(昭和 29 年)には支社に昇格して大阪市道修町 4-21 神戸銀行大阪支店の 6F に移転、1960 年(昭和 35 年)11 月には大阪市東区北浜 3-5 大阪神鋼ビル、更に 1971 年(昭和 46 年)7 月には中央区高麗橋 4-2 大阪朝日生命館(上図)に移転しました。

名古屋支社



名古屋支社が開設されたのは 1962 年(昭和 37 年)3 月ですが、それまでは支局として大阪支社の管轄下におかれていました。中京地区の営業活動が活発化したためこの時に支社に昇格して中区丸の内 1-17 長銀ビル(左図)に移転しました。その後平成 6 年 5 月 16 日に中区錦 3-23 栄町ビルに移転、平成 21 年 9 月 7 日現在の中区錦 3 丁目 6-35 名古屋郵船ビル 8 階に移転しました。

東北支社



東北支社は 1966 年(昭和 41 年)2 月 1 5 日青森支局として開設され、秋田・岩手・青森の酒造メーカーを対象とする営業活動が主でしたが、その後更に東北各県の営業活動を強めるために 1975 年(昭和 50 年)7 月 1 5 日東北支社と改称し、青森市長島 2-1-2 シンドウビル(左図)に事務所を設けていましたが 2003 年(平成 15 年)3 月支社を閉鎖しています。

函館放送局



函館放送局は 1953 年(昭和 28 年)7 月 1 日開局しました。開局当初は真砂町の日魯ビルに設けましたが、1977 年(昭和 52 年)1 1 月梁川町に鉄筋コンクリート二階建ての局舎(左図)を建設しラジオ・テレビのスタジオも完備して地元制作番組と地元スポンサーに対する営業活動に努めています。

旭川放送局



旭川放送局は 1953 年(昭和 28 年)1 1 月 24 日開局しました。当初は営業部門は神居村の送信所にありましたが昭和

30年には旭川駅前の旭ビル内に完成した事務所に移転しました。新事務所にはスタジオも完備しておりローカル番組の制作と営業活動が設局的に展開されるようになりました。その後1991年(平成3年)1月13日JR旭川東隣に局舎(上図)が完成しましたが、旭川駅周辺の再開発のため局舎は閉鎖され現在は市内一条通8丁目542-4 一条緑橋通ビル3階に移転しています。

帯広放送局



帯広放送局は1955年(昭和30年)8月1日函館・旭川に続く3番目のローカル局として事務所を帯広市東2条南9丁目の林業会館内に設けました。その後1963年(昭和38年)には市内南5条西5丁目に新築移転しましたが、現在は市内西2条南10丁目11ISビル2階(左図)を営業拠点として活動を続けています。

釧路放送局



釧路放送局は1956年(昭和31年)10月8日ラジオ放送を開始しました当初の送信所と局舎は釧路市鶴が袋35でしたが、1962年(昭和37年)5月8日釧路テレビ局が開局し同年6月30日市内城山2丁目に新築した局舎(左図)に移転しています。

室蘭放送局



室蘭放送局は1956年(昭和31年)10月23日ラジオ局開局、1959年(昭和34年)3月25日にテレビ局が開局しました。開局当初の事務所は室蘭市公園町2丁目でしたがその後市内山手町3丁目に局舎(左図)を建設して営業活動を行ってきましたが2003年(平成15年)3月経営の合理化の一環として放送局を閉局しました。

北見放送局



北見放送局は1956年(昭和31年)10月31日開局しましたが、開局当初営業部門は北見駅前のビルの一室を拠点として活動を開始しましたが1961年(昭和36年)9月市内高台地区に新局舎が落成し制作機能も完備しました。その後

市内幸町 3 丁目に新局舎(左図)を建設しました。(現在は北見市幸町 2 丁目 1-28 フチサワビル 502)。

尚、1956 年(昭和 31 年)10 月 30 日に網走放送局を開局しましたが 1960 年(昭和 35 年)7 月 24 日に無人局となったため放送局を閉鎖しています。

小樽放送局



小樽放送局は、1952 年(昭和 27 年)10 月 1 日小樽支局として小樽市色内町の三井物産ビル(左図)に開設しました。その後 1954 年(昭和 29 年)には小樽支社に格上げし翌昭和 30 年には小樽放送局としてスタジオ等の施設も完備した放送局としてスタートしましたが、小樽の斜陽化に伴い 1985 年(昭和 60 年)には放送局を閉鎖して営業部門は本社内において活動を継続していました。平成に入り小樽も観光都市としての活性が進んだため 1990 年(平成 2 年)には放送局を再開しましたが 2003 年(平成 15 年)3 月経営の合理化の一環として放送局が閉鎖されました。

苫小牧放送局



苫小牧放送局は 1965 年(昭和 40 年)9 月 15 日苫小牧支局として市内本町に開設されました。業績の拡大に伴い 1985 年(昭和 60 年)には放送局に昇格しましたが局舎も汐見町、未広町の森林組合ビル、錦町の日本生命ビル(左図)と変わりましたが 2003 年(平成 15 年)3 月経営合理化の一環として無放送局は閉鎖されました。

4-6 テレビ開局とスポーツ番組

テレビ放送が始まり番組編成にも大きな変化が見られましたが、中でも大きな変化を見せたのはスポーツ番組でした。これまでのラジオとは違ったプロ野球やプロレスの中継はテレビに対する関心を高めテレビの媒体価値を大きく高める処となりました。北海道に誕生した HBC テレビにとっては、特にウィンタースポーツの中継は独占場と云ってもよく、どちらかと云えばマイナーと云われていたウィンタースポーツをネットワーク

を生かして全国放送を行う事で全国的にも関心を高め、冬季オリンピックの開催後は、道内テレビ局が全局独自のタイトルでジャンプ競技を中継するまでに至る等、ウィンタースポーツに対する好感度を高める大きな原動力となっています。

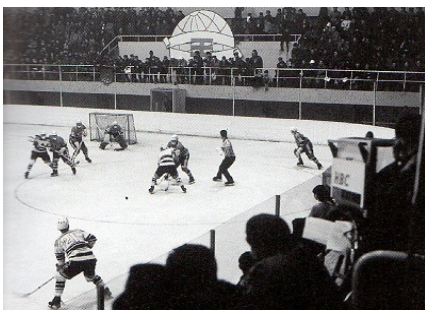
HBC テレビが最初に中継に取り組んだのは開局 2 年目の昭和 33 年(1958 年)の[第 13 回国体冬季大会ジャンプ競技]でした。この年には[複合ジャンプ][純ジャンプ]等の中継を全国中継で行い、営業的にもネットワークを含めた番組のセールスを体験し[冬季スポーツ番組の営業化]に大きな自信を得ることが出来ました。



このような営業・制作両面の経験に基いて実施されたのが[HBC 杯争奪ジャンプ大会]で昭和 34 年(1959 年)3 月 4 日に第一回大会を開催し今日まで継続して実施されています。

当時は昭和 32 年から実施されていた[HBC 杯争奪全道大回転競技大会]と昭和 34 年からスタートした

[HBC 杯争奪回転競技]が HBC の三大冬季スポーツ競技として全国中継されていました。この他にも[宮様スキー大会ジャンプ競技]もあり、スキー中継花盛りといった時代でもありました。スキー競技と並んで忘れることの出来ないものに[アイスホッケー]があります。当時北海道では苫小牧の[王子製紙]と[岩倉組]がアイスホッケーチームの双璧として君臨していました。



昭和 35 年(1960 年)からは[HBC 杯争奪王子岩倉アイスホッケー定期戦]がスタートし、毎年初を飾るスポーツ中継として定着していました。この定期戦も昭和 55 年(1980 年)からは、岩倉チームが解散し変わって雪印チームが誕生したことから[HBC 杯争奪王子製紙対雪印アイスホッケー定期戦]に衣替えし

ました

雪印乳業がスポンサーとなって定期的実施されている競技大会[雪印(現在は雪印メグミルク)杯全日本ジャンプ大会]も歴史のある競技会で HBC テレビが当初から放送を行ってきました。この大会は、雪印乳業が雪印シャンツエを建設し札幌市に寄贈した昭和 33 年(1958 年)から開催されていますが、昭和 45 年(1970 年)宮の森ジャンプ競技場に会場を移して実施しています。昭和 48 年(1973 年)の第 14 回大会から HBC テレ

ビの放送が始まり当初は HBC-TBS のネット放送でしたが 2010 年からは HBC-BS11 のネットで放送が行われています。

この様にテレビ開局草創期にあってスポーツ番組は営業的にも色々な意味を持つていました。全国的に余り認知されていないスキー競技を全国ネットで放送する為には、スポンサー、代理店、ネット局の理解と協力が不可欠です。このためには関係者に現場に立ち会って貰い迫力ある臨場感を実感して貰う事もセールス上大変重要な事でした。年々スポンサーサイドの理解も深まって来たもののネットワークセールスに携わる東・阪・名の営業部門は大変苦勞の連続でした。現在の全ネットワークでの放送の姿を見ると今昔の感を禁じえません。

4-7 北海道開発番組の制作と営業活動

前述のように 1952 年は北海道総合開発第一期 10 年計画がスタートした年ですが、1952 年 4 月 1 日の第一次 10 年計画スタートと機を同じくして新しい放送メディアとしての民放ラジオ(HBC ラジオ)放送がスタートしました。HBC ラジオは昭和 28 年の[北海道史シリーズ]を皮切りに年毎に新しいテーマで開発の PR 活動に務めて来ましたが、昭和 32 年に HBC テレビ放送がスタートして以来、映像に主眼を置いた PR 活動の重要性が所管官庁サイドにも認められ、北海道・北海道開発局・HBC 三者による検討の結果実現したのが開発番組シリーズ[明日を築く]でした。この番組は昭和 36 年 1 月 21 日から 3 月 19 日まで 30 分番組 10 本がシリーズとして放送され東京放送(TBS)にもネットされました。番組の制作面は省略しますが、営業面で特筆されるのは提供スポンサーとして北海道に基盤を置きたいいわゆる硬派スポンサーの全面的な協力が得られた事です。セールス活動には開発局の広報マンの全面的な支援があった事も大きな勝因の一つで、成功事例としてこの後の硬派スポンサー攻略のモデルケースでもありました。この営業活動には本支社始め道内各放送局があたりました。提供頂いたスポンサーは次の通りです。富士製鉄、北海道電力、道漁連、道信漁連、野村鋳業、日本舗道、大成建設、大林組、中島組、帯広建設業協会、旭川建設業協会、金沢組、菱中興業、株木建設、清水建設、函館ドッグ、熊谷組、川田工業、荏原製作所、久保田鉄工、三菱日本重工業、西松建設、村井建設、佐藤工業、石川播磨重工業、日本甜菜製糖、クレードル興業、日本ビール、ニッカウイスキー、合同酒精、大洋漁業、芝浦製糖、岩倉組、本州製紙、日本セメント、東洋高圧、富士セメント、王子製紙、国策パルプ、日本鋼管、室蘭市、日本航空、東急建設、北日本航空など。